

日本における英語研究史

西野和子

はじめに

この小論は、「日本における英語研究史¹」のうち、音に関する部分の発達、変遷を辿るものである。研究史のとらえ方は種々可能であろうけれども、英学の起源からその発達を詳述した書物はすでにあるので、ここでは、時代別に影響力が強かったと考えられる資料を選び、実際に当て考察することを通して、英語研究史の流れをくみとりたいと思う。すなわち、英語音が、英語文化に親しみのなかった当時の日本人によってどのような音連続として受けとめられ、英語が、どのような音体系をもつものと認識されたかを観察する。言語はそれぞれ異なる体系を有するから、一文化に他言語が移入されるさい、そこに必ず何らかの同化 (assimilation) 又は転移 (transfer) が起こることは自然である。そしてその起こり方は、その二言語の体系差と密接な関連をもつ。したがって、英語音体系と日本語音体系の差を考慮しつつ観察をすすめる必要がある。その上で、時代別の各資料を比較し、その差を検討して時代の推移と音認識の発達を学ぼうとするものである。

I 資料

英語が日本に入ったその起源は、英国船 Phaeton 号の長崎入港 (1808・文化5年) にさかのぼる²。その歴史は160年余にわたり、その経路はかなり複雑である。そのそもそもの始まりは、徳川幕府の命により国防の目的で、当時長崎に存在したオランダ通詞たちが、オランダ人ブロムホフ (Jan Cock Blomhoff) に師事して英語を学び始めたことに端を発している。

まず以下のように時代区画をたて、時代別に資料を選択することとする。

1. 草創期 (1808～1864 文化～文久)

蘭学の時代であるが先駆的な辞書、会話書などが少しずつ出始めた時代。

2. 英学勃興期 (1865～1872 慶応元年～明治5年)

蘭学に代って英学が急速に盛になったが、蘭学の影響がなお顕著な時代。

3. 英学推進期 (1873～1881 明治6年～14年)

蘭学を離れ、英学が中心になったが、やや中国の影響のみられる時代。

4. 英学興隆期（1882～1897 明治15年～30年）

実用英語が急速に進み、一般に普及していった時代。

5. 英語学発生期（1898～1912 明治31年～45年）

学問的英語研究が発生し始めた時代。

6. 英語学発達期（1913～ 大正以後）

近代的英語学確立の時代。

本稿では第一期および第二期を扱い、第一期より、本木正栄ら編：^{アンゲリヤ}語厄利亜語林大成(1814・文化11年、写本)、第二期より、薩摩学生編：和訳英辞書（いわゆる薩摩辞書、1869・明治2年）を選び、主な対象として観察する。

他にも資料のある中でとくに英和辞書を選ぶについての理由は単純である。すなわち、辞書というものは、言語修得のさい、特殊な目的に限定されず、その対象言語一般に対する知識の基準となるものであり、辞書の中でも、和英辞書より英和辞書の方が一層一般的であると考えられるからである。そういう意味から、よい辞書はもっとも広く用いられ、それだけに時代に対する影響も甚大であったと思われるからである。

発音表記という面からみれば、第一期でも語厄利亜国語和解（全10巻、いわゆる興学小筈、1811）があり、かたかなによる発音表記がなされているが、これは英語の単語と会話の書であり、構成も始の巻のみ単語集で、たとえば時候、数量、官位、人事、器材、服食というふうに分けてある。又その他2巻は平用成語すなわち日常頻度の高い語句であり、他の5巻は対話となっていて辞書の体裁をとどめない。又第二期では、1859年長崎版の和英・商売対話集に、かたかなのみでなく●と▲を用いて文強勢への配慮を示したあとが見られ、その凡例に、「●ハ弱クシテ有カ如ク無カ如シ▲ハ強ク高調ニ言フ徴トス」とある。同年出版の中浜万次郎訳：英米対話捷徑にも、耳から入った音を表わすべくかたかな表記の工夫のあとは見られるが、これも会話書で、しかも訳者の生いたちからみてもなまりのある米語である。その他茂亭村上義茂著：三語便覧（3巻、1956・安政3年）も三千余の単語を部門別に並べ、日本語の下に^{フランス}コトバ、^{エグレス}コトバ、^{オランダ}コトバ、^フ蘭西語、^英傑列語、^和蘭語を示し、それぞれかたかなをつけている。英和辞書でない点と、発音表記に綴り読みの傾向が強クオランダ語の影響もかなりあるとみられるので直接資料とはしなかったが、当時の版としては注目に値するものである。福沢諭吉の増訂華英通語（1860・万延元年）もやはり部門別に日本語を示した和英辞書に属するものだがかたかなの発音表記が附され、すでに出色の考案がなされている。すなわちその漢文の凡例の最後に、「ウヲ附濁点者ヅバ与ウヲ之間音也 ヌ字要急音与上字合読之稍近於ン音而自有別」とあり、この時すでに英語【v】音を「ヴ」、「ヅ」で、又子音前および末尾の【n】音を「ン」でなく「ヌ」で表わす工夫がなされており、その他にも日本語と異なる音を敏感に

意識したあとがいくつか見られ、注目に値する。

上記の諸点にもかかわらず、語厄利亜語林大成と和訳英辞書を選択した理由は以下のごとくである。つまり、何といたっても語厄利亜語林大成はわが国最初の英和辞書であり、現在の基準から考えれば、永島大典氏の指摘の通り「不完全な単語集³」にすぎないかも知れぬが、既述の、日本における英学の発端以後わずか6年を経過したのみの1814年に出ているのは銘記すべきことである。加えて、第一期では他に辞書らしいものがなく、第二の辞書といわれるものが、その後48年を経過した文久2年(1862)の堀達之助ら編英和対訳袖珍辞書(通称開成所辞書)である事実をも考慮するとその存在意義は大きい。この開成所辞書はわが国最初の活字本の辞書で、当時の英学会に対するその影響は大で、その後も版を重ねたが、これには発音表示がない。ここに扱う薩摩辞書も、内容は、開成所辞書の翻刻であることがその「序」に明らかであるが、第二期最初の発音表示辞書である点が重要である。この薩摩辞書は2年後の明治4年(1871)にはや再版が出され、その後明治20年頃まで広く用いられ影響力甚大であったと伝えられる。この4年版の一大特徴は、2年版の方法を改め、「片仮名ヲ省キウエブストル氏ノ辞書ニ拠テ是ニ易ルニ^{エキセント}音符並ニ^{シレブル}字綴ヲ以テス」とその序が示す如く、表記法も新しくとり入れ、しかも高さ(pitch)、強勢(stress)、字綴(syllable)などかぶせ音特性にも関心をよせていることである。ただし本稿では、上述の第二期最初の発音表示辞書である点に加えて、第一期の語林大成との方法上の関連を考慮して、2年版を観察の対象とすることにした。

II 語厄利亜語林大成

語厄利亜語林大成は和紙、和とじのたて書きであり、手書きの写本である。まず本木正栄による7頁にわたる「叙」に始まり、本木正栄、橋林高美、吉雄永保による15頁にわたる「題言が続いている。次に篇目が本書の構成を示している。この「叙」、「題言」、「篇目」だけでも、その形式に、内容に、そして行間に、当時の時代背景、英語に対する考え、英語音を受けとめたさいの意識の程度など実に多くを語っている。いま篇目のみをここにあげよう。

頭音

卷之一	^エ A	之部
卷之二	^ビ B	之部
卷之三	^シ C	之部
卷之四	^{ディ} ^イ DE	之部
卷之五	^{エフ} ^ゼ FG	之部

(これまで1頁一筆者)

卷之六	^{エーチアエジイケ} H I J K	之部
卷之七	^{エルエム} L M	之部
卷之八	^{エンノー} N O	之部
卷之九	^ピ P	之部
卷之十	^{キヨアル} Q R	之部
卷之十一	^{エス} S	之部上

(これまで1頁一筆者)

卷之十二	^{エス} S	之部
卷之十三	^{テイ} T	之部
卷之十四	^{ユウヒ} U V	之部
卷之十五	^{ドブヨウワイイキセツト} W Y Z	之部

目次終

以上で明らかのように、本書の構成は全15巻、頁表示はない。各巻の始と終に墨たて書きでそれぞれ「諺厄利亜語林大成巻之()」、「諺厄利亜語林大成巻之()終」とあり、その他各部のみだしは墨書き、各辞書項目は黒インキの美しい筆記体で、英語は横書き、右側にたてにかたかな、語意は日本語たて書き、漢字とかたかなであって、漢字によってはかたかなのふりがながほどこしてある。各巻頭にこれもたて書きで、

「長崎 和蘭冢訳 本木正栄等奉
命 訳編」

とあるのも当時の時代感覚を如実に伝えていて興味深い。

各巻の構成をもう少し詳細にみるとしよう。原則として1頁に6語、ごくたまに長めの註釈を附してあるものがあり、その頁と各巻頭の頁はより少数になっている。上述の通り頁番号は打っていないが頁数は以下のごとくである。なお各部が左頁で終わったさいその裏は白紙になっている。

卷之一	55
卷之二	83
卷之三	83
卷之四	D45, E29
卷之五	F16 (Fornication より), G32, F34 (巻頭より) ⁴
卷之六	H33, I14, J7, K8+2頁白紙
卷之七	L35, M45
卷之八	N21, O21

卷之九 P 71

卷之十 Q 6, R 47

卷之十一 S上54

卷之十二 S下29+29白紙(隔頁)

そして13~15巻は無く、不完全な巻之12以下、ごく断片的に、MNLOKNHRPSの順に、あるものは数語、長いものでも2頁で、かたかなもあつたりなかつたり、語意のないものもある。

発音に関してはかたかなのみであるから、分節音そのものについても大そう不完全であり強勢に関する意識などどこにも見られない。全体に誤写と思われるものは多数にのぼり、中には上から紙をはって書き直したものの1個所、矢印と位置を入れかえたものの2個所(み)のほか、斜線で消したものの若干あり、perfumeのfが「~~f~~」のように部分訂正されているに至ってはほほえましいというほかはない。ミススペルも多く、又かなが全部おちている頁も数個所にのぼる。しかし現代では思いも及ばぬ諸事実の中に当時が偲ばれて、その苦勞が見る者の心に伝わってくる。

さきにあげた篇目だけでも詳しく観察すれば論じ得る点は多々あるが、いますこし「叙」と「題言」から編者の意図を探ってみよう。「叙⁵」には本書成立の経過が記されているが、その一部を引用しよう。

「命ありて寄陽に祇役せしめ我譯家慈に肇て其業を創る事を得たりと雖とも其言詞の連続音韻の反切殊離異乖にして州を共にし俗を等する蘭人も尚是を難する況や昔人業己に5方の州を分て風を異にし俗を別にする者の為し得へきに非すをや然りを雖とも恭しく

上命の重きを奉し……」

かくして語厄利亜興学小筈10巻48編の訳述を経て語林大成となったものだが、「その意を達せん事を要とす然れとも小人浅学薄識固よりとし本朝の雅言正語に拙く又漢訳の要領に疎きを以て魚魯羊芋の誤なきにしもあらず……」というわけで編者の苦勞が察せられる。そして最後に

「文化十一年甲戌夏六月

和蘭家譯 長寄 本木^正 謹識」

と記して結んでいる。

「題言」では、八品詞——静詞(名詞)、代名詞、動詞(to do)、動静詞(doing)、形動詞(形容詞)、連続詞(接続詞)、所在詞(前置詞)、歎息詞(感歎詞)——をそれぞれ定義、説明し、最終項には一語で適訳を表わすむつかしさを語っており興味深いが、残念なことに発音については一切ふれていない。がしかし、一切ふれられていないところにも音に対する意識

が語られていて面白い。以上大まかに本書の構成を述べて、これから音韻についての観察をすすめることとしよう。本書の音韻表記はかたかなを以て示されており、それがすべてであることはすでに述べたが、実例に当たってみると実に多種多様でとまどうことが多い。オランダ語発音の影響が少くないことは、すでにふれた本書の成りたちからも容易に納得できる。又耳から入ったと推測されるものと眼から入ったと考えられるものの差は随所に表われるがその経路を客観的に実証することはほぼ不可能に近い。さらに、現代日本語の借入様式と異なるものも多くあり問題は多岐にわたっている。

以下にあげる資料は、語厄利亜語林大成の諸項目のかたかな音韻表記を現代の日本語音素表記に置きかえ、現代英語で広く用いている英語音素を基準として配列したものである⁶。なまの音声資料を欠くゆえに、実際音に当たって確認することはできないが、かたかな表記である以上、外来語の移入過程と基本的には同様の転移様式をもつと仮定することができる。一つの言語は、そのもとの形のまま他の言語に移入されることはまれであり、その移入過程は Gleason も認めるように 'random and unsystematic' である場合も多く、これは音韻のみならず、語構造、文構造など、言語の各レベルに見出せることではある⁷。しかしそうはいても、日英両語の音素体系の比較に基づいて、転移に関し相当程度を予知することはできるはずであり、これは、編者の英語に対する言語学的意識の深淺とは別に考えてさしつかえない⁸。用いた表記体系は次のごとくであり⁹、転移に関する推論によりもっとも可能性大と考えられるものは日本語音素の左欄においてである。

英語母音音素¹⁰

i:		u:
i		u
e	ə:	(o)
(ε)	ə	ɔ:
æ	ʌ	ɔ
(a)		ɑ:

日本語母音音素¹⁰

i		u
e		o
		a

英語子音音素

p		t		k
b		d		g
		ts	tʃ	
		dz	dʒ	
m		n		(l)
		l		
f	θ	s	ʃ	h
v	ð	z	r	ʒ
w				j (w)

日本語子音音素¹⁰

p		t		k
b		d		g
		ts	tʃ	
		dz	dʒ	n, (ŋ)
		n		
		r		
		s	ʃ	h
		(z)	(ʒ)	
w				j (w)

資料I 諳厄利垂語林大成

1. 母音

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
i:	ii	believe/bili:v/ peach/pi:tʃ/	ベリーフ/beriihu/ ピーチュ/piitʃu/	ee ei	feast/fi:st/ peace/pi:s/ ceiling/si:liŋ/ receive/risi:v/	ペース/peesu/ ヘースト/heesuto/ セイリン/seirin/ レセイフ/resei <u>h</u> u/
i	i e	chin/tʃin/ six/siks/ sit/sit/	チン/tʃin/ シツキス/ʃikkisu/ セット/setto/	ii ei	chill/tʃil/ forgive/fəgi:v/ copy/kɔpi/	チール/tʃiiru/ ホルギーフ /horugij <u>h</u> u/ コペイ/kopei/
e	e	hen/hen/	ヘン/hen/	ee	heaven/hevn/ sweat/swet/	ヘーヘン/heehen/ スウェート /suweeto/
æ	a e	fact/fækt/ Latin/lætin/ ham/hæm/ map/mæp/	ハクト/hakuto/ ラテイン/ratin/ ヘム/hem/ メップ/meppu/	ee	fathom/fæðəm/	ヘードム/heedomu/
a:	aa	calm/ka:m/	カーム/kaamu/	e er a ar	cast/ka:st/ balm/ba:m/ star/sta:/ half/hɑ:f/ pardon/pɑ:dən/	ケスト/kesuto/ ベルム/berumu/ ステル/suteru/ ハフ/hahu/ パルドン/parudon/
ɔ	o	doctor/dɔktə/ hop/hɔp/	ドクトル /dɔkutoru/ ホップ/hoppu/			
ɔ:	oo	fall/fɔ:l/ stalk/stɔ:k/	ホール/hooru/ ストーク/stooku/	or	bɔrn/bɔ:n/	ボルン/borun/
u	u o	book/buk/ cook/kuk/ (unstressed) to/tu/	ブック/bukku/ コック/kokku/ ト/to/	uu	foot/fur/ good/gud/	フート/huuto/ グード/guudo/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
u:	uu	food/fu:d/ pool/pu:l/	フート/huuto/ プール/puuru/	eeu	beauty/bju:ti/	ベーウテイ/beeuti/
ʌ	a	なし		o oo u ju	come/kʌm/ love/lʌv/ dove/dʌv/ gloves/glʌvz/ cut/kʌt/ custom/kʌstəm/ Sunday/sʌndi/	コム/komu/ ロフ/rohu/ ドーフ/doohu/ ゴローヘス /goroohesu/ クット/kutto/ キュストム /kjustomu/ シュンデイ/ʃunde/
ə	a	afford/əfɔ:d/		e o ou er or ur	abandon /əbændən/ button/bʌrən/ populous/pɒpjuləs/ (scissors の誤) sissors/sizəz/ butter/bʌtə/ paper/peipə/	エバンドン /ebandon/ ビュトン/bjuton/ ポヒュロウス /pohjurousu/ シセルス/ʃiserusu/ ブットル/butoru/ ペプル/pepuru/
ə:	a	なし		ir eer jur	bird/bɜ:d/ birthday/bɜ:θdeɪ/ pearl/pɜ:l/ curtain/kɜ:tən/ return/ritɜ:n/	ビルト/biruto/ ビルスデイ /birusudei/ ペールル/peeruru/ キュールテン /kjuruten/ レテュリエン /retjurjun/
ei	ee	abase/əbeɪs/	エベース/ebeesu/	ei e	way/weɪ/ paper/peipə/	ウエイ/weɪ/ ペプル/pepuru/
ai	ai	five/faɪv/	ハイフ/haihu/	ei ii ee i	fight/faɪt/ time/raɪm/ crime/kraɪm/ guide/gaɪd/ bite/baɪt/ (pirate の誤) pirat/paɪreɪt/	ヘイト/heito/ タイム/teimu/ キリーム/kiriimu/ ギーデgiide/ ベート/beeto/ ピラット/piratto/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
ɔi	oi	joy/dʒɔi/ noise/nɔiz/	ジョイ/dʒɔi/ ノイズ/noizu/			
au	au	なし		oo ou	doubt/daut/ bough/bau/ out/aut/	ドート/dooto/ ボウ/bou/ ヲウト/outo/
ou	oo	boat/bout/ home/houm/	ボート/booto/ ホーム/oomu/			
iə	ia	なし		e, i eer	experience /ɪkspɪəriəns/ hear/hɪə/ year/jiə/	エクスペリンス /ekisuperinsu/ ヘール/heeru/ エール/eeru/
ɛə	ea	なし		eir eer	fair/fɛə/ bear/bɛə/ hair/hɛə/	ヘール/heiru/ ベール/beeru/ ヘール/heeru/
ɔə	oa	なし		oor	door/dɔə/ more/mɔə/	ドール/dooru/ モール/mooru/
uə	ua	なし		uur	poor/puə/	プール/puuru/
ɛiə	eia	なし		eijur	player/plɛiə/ prayer/prɛiə/	プレイヤー /pureijuru/ プレイヤー /pureijuru/
aiə	aia	なし		air eir ir iir	fire/faiə/ hire/haiə/ admire/ədmaɪə/ inquire/ɪnkwaɪə/ require/rikwaɪə/	ハイル/hairu/ ヘール/heiru/ アトメール /atomeiru/ インクイル/inkuiru/ リクイール/rikuiiru/
auə	aua	なし		our	flower/flauə/ our/auə/	フロウル/hurouru/ ヲウル/ourul/

2. 子音

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
p	p pu	perfect/pəːfɪkt/ pipe/paɪp/ play/pleɪ/ pretty/prɪti/	ペルヘキト /peruhekito/ パイプ/peipu/ プレイ/purei/ プレテイ/puretii/			
b	b bu	amiable/eɪmiəbəl/ boy/bɔɪ/ break/breɪk/ bring/briŋ/	アミアープル /amiaaburu/ ボイ/boi/ ブレーキ/bureeki/ プリンキ/buriŋki/	h	arbor/ɑːbɔː/ elbow/elbɔː/	アルホル/aruhoru/ エルホウ/eruhou/
t	t to	stay/steɪ/ time/taɪm/ introduction /ɪntrədʌkʃən/	ステイ/sutei/ タイム/teimu/ イントロデュクシン /ɪntorodʒukʃɪn/	ta te	contrary/kɒntrəri/ trap/træp/ contrive/kəntraɪv/	コントラリー /kɒntararii/ テレップ/tereppu/ コンテレイフ /kɒntereihu/
d	d do	doubt/dəʊt/ Friday/fraɪdaɪ/ drop/drɒp/ drown/draʊn/	ドート/dooto/ フライデイ/fraidei/ ドロップ/doroppu/ ドロウン/doroun/	da de di to	draw/drɔː/ dragon/dræɡən/ dream/dri:m/ friend/frend/ friendship /frendʃɪp/	ダラウ/darau/ デレコン/deregon/ ディリーム/diriimu/ フレント/hurento/ フrintシップ /hurintoʃippu/
k	k ku	come/kʌm/ kennel/kenəl/ cloth/klɒθ/	コム/komu/ ケン子ル/kenneru/ クロース/kuroosu/	ka ke ko ki	claw/klɔː/ clasp/klæsp/ cripple/kripl/ clock/klɒk/ crocodile /krɒkədail/ cricket/krikit/ eclipse/ɪklɪps/	カラウ/karau/ ケレスプ/keresupu/ ケレップル /kereppuru/ コロック/korokku/ コロコデイル /korokodeiru/ キリケット /kiriketto/ エキリプス /ekiripusu/
g	g gu	give/gɪv/ goat/ɡoʊt/ glue/ɡluː/	ギーフ/giihu/ ゴート/gooto/ グリュ/gurju/	k < i u ge	dig/dɪɡ/ leg/leg/ grand/grænd/ great/greit/	ディキ/deiki/ レク/reku/ ゲレント/gerento/ ゲレート/geretto/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
				go gi green	gloves/glavz/ glory/glɔri/ green/gri:n/	ゴローヘス /goroohesu/ ギロリ /gɪrori/ グリーン /giriin/
f	h	fit/fit/ infənt/infənt/	ヒット/hitto/ インヘント /inhento/	p	coffin/kɔfin/	コッピン/koppin/
v	b	なし		h w	heaven/hevən/ gloves/glvz/ heavy/hevi/	ヘーヘン/heehen/ ゴローヘス /goroohesu/ ヘーウイ/heewi/
θ	s	cloth/klɒθ/	クロス/kuroosu/	ts	eleventh/ilevənθ/	エレヘンツ /ereehentsu/
ð	z[dz] d	なし feather/feðə/	ヘドル/hedoru/	s t	clothes/klouðz/ either/aiðə/	クロスセ /kuroosuse/ エイテル/eiteru/
s	s ʃ	satisfaction /sætɪs'fækʃən/ sorrow/sərəu/ search/sə:tʃ/ sick/sɪk/	サティスハクション /satisuhakuʃon/ ソルロウ/soruru/ シールチュ /ʃiirutʃu/ シツキ/ʃikki/			
z	z ʒ	なし なし		s ʃ	desire/dizaiə/ season/si:zən/ (musicの誤) musick/mju:zik/ resist/rizist/	デセール/deseeru/ セーソン/seezon/ ミュージック /mjuuʃikki/ レシスト/refisuto/
ʃ	ʃ	fellowship /felouʃip/ shadow/ʃædou/	ヘルローシップ /herurooʃippu/ シドウ/ʃidou/	s	bishop/biʃəp/ shelter/ʃeltə/	ビソップ/bisoppu/ セルトル/serutoru/
ʒ	ʒ	なし		ʃ	casual/kæʒuəl/ pleasure/plezə/	ケシュアル/keʃuaru/ プレシュル/pureʃuru/
h	h			zero	home/həum/ hood/hu:d/	ホーム/oomu/ ウート/uuto/

英語 音素	日 本 語 音 素					
	音韻比較による予測	実 例		予測外 変 化	実 例	
		英 語	日 本 語		英 語	日 本 語
tʃ	tʃ tʃi	cherry/tʃeri/ kitchen/kitʃən/ なし	チェルリー /tʃerurii/ キッチン/kittʃin/	tʃu s ts k	peach/pi:tʃ/ march/mɑ:tʃ/ to march /təma:tʃ/ enrich/inritʃ/	ピーチュ/piitʃu/ メルス/merusu/ トメルツ/tomerutsu/ エンクリック /enrikku/
dʒ	ʒ[dʒ] ʒ[dʒi]	jacket/dʒækɪt/ join/dʒɔɪn/ なし	ジエケット /dʒeketto/ ジョイン/dʒɔɪn/	ʒu [dʒu] z tʃ j	advantage /ədʒvæntɪdʒ/ Japan/dʒəpæn/ object/ɔbdʒɪkt/ badge/bædʒ/ stage/steɪdʒ/ January /dʒænjuəri/	アトハンテージ /atohanteedʒu/ ゼヤッペン /zejappen/ オブゼキト /obuzekito/ バッチュ/battʃu/ ステータチュ/steetʃu/ ヤニユエウリ /janjuweri/
r	r	race/reɪs/ run/rʌn/	レース/reesu/ リユン/rjun/			
l	r ru	leap/li:p/ dull/dʌl/	リープ/riipu/ ドル/doru/			
m	m	many/meni/ moon/mu:n/	メニ/meni/ ムーン/muun/			
n	n [n]	nail/neɪl/ noon/nu:n/ dancer/dɑ:nsə/ none/nʌn/	子ール/neeru/ ヌーン/nuun/ テンスル/tensuru/ ノン/non/			
ŋ	ŋ ŋu	なし なし		nki	bring/brɪŋ/ during/dʒuəriŋ/	ブリンキ/burinki/ デューリンキ /djunrinki/
w	w u	one/wan/ swim/swɪm/ なし	ワン/wan/ スウイム/suwimu/			
j	j	communicate /kəmjuːnɪkeɪt/	コムムユニケート /kommjuːnɪkeeto/			

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
		(music の誤) musick /mju:zik/	ミュージキ /mjujikki/			

註：原則として一般性の高いもの2例，頻度の低いもの1例とし，明らかに誤りによるとみられるものは省いた。又変化の複雑な音素で紙数の関係から1例にとどめたものもある。以上資料Ⅱについても同様である。

実例に当たってみると実に多様な現象が随所にみられることはすでにふれた。すべての点に言及するいとまはないが，主な点，興味ある点を拾って，母音，子音別に述べてみよう。

1. 母音

既述の通り，音韻理論上予測できる移入形式は資料リスト中左欄においてあり，これは抵抗なく納得できる¹¹。たとえば *i* > *ii*，すなわち，*peach* /pi:tʃ/ がピーチ /piitʃi/，*belief* /bili:f/ がベリーフ /beriihu/ となることは少くともその部分に関するかぎり自然に受けとれる。しかし，*peace* /pi:s/ がペース /peesu/，*feast* /fi:st/ がヘースト /heesuto/ となりさらに *ceiling* /si:lin/ がセイリン /seirin/，*receive* /risi:v/ がレセイフ /reseihu/ となると，その根拠を明らかにするすべがない。ただ，リストにはあげていない他の諸例からみても，綴り 'ei' に対してはかな「エイ」が与えてある点は一貫しているので，これが眼から入った綴りよみであろうかというかすかな判断を下せる程度である。

同様に，*i* > *i*，すなわち *chin* /tʃin/ がチン /tʃin/，*six* /siks/ がシックス /fikikisu/ となっているのは納得できるが，*chill* /tʃil/ がチール /tʃiiru/，*forgive* /fəgiv/ がホルギーフ /horugiihu/ というふうに母音を重ねる（音声学的には長音化）現象はすでに予測外であり，*copy* /kopi/ がコペイ /kopei/ となると説明はさらに苦しくなる。この場合は耳から入ったもので末尾音に多少の *glide* があったのを，受け入れ側の意識的配慮からペイというかなに表わしたと云えぬことはない¹²。

しかしこれも決して一貫性があるわけではなく，類似環境に起こる *happy* /hæpi/ はハペイでなくハッピー /ii/ となっており，副詞末尾の *-ly* もレイではなくリ又はリイである。名詞末尾の *-ty* はティとなっているが，多くの場合末尾のイが多少小さく書かれているところから /tei/ ではなく /ti/ 又は /tii/ を意図したものと考えられる。

以上ごく一部を取りあげただけでもその多様性は容易に例証することができる。多様性に満ちているという事実はすなわち一貫性に乏しいということでもあって，体系の欠如にもつ

ながるものであるが、次にあげるものは、音韻論的に予測できるもののわく外ではあっても本書中ではやや一貫した現象であり、比較的多数の実例をもっている。

1. 長母韻化 : $i > ii$, $e > ee$, $u > uu$
2. 短母韻化 : $\alpha : > a$
3. 母音の質変化 : $i : > ee$, $i : > ei$, $i > ei$, $ai > ei$

$i > ii$ という変化は日英の音素比較のレベルでは予測しがたいが、もし異音レベルにまで立ち入れれば、有声子音の前で母音が多少長音化されるという習性から仮説をたてることはできる。これらの単語が耳から入ったものであれば、 $give/giv/$ はキーフ $/kiihu/$, $chill/tʃil/$ はチール $/tʃiiru/$ と敏感に聴きとったと考えられないことはない。上記リスト以外にも若干の例はあるが、すべての類似環境で一貫しているわけではなく、 $is/iz/$ はイス $/isu/$, $did/did/$ はデイト $/ditto/$ といった具合である。 $e > ee$ についても同様であるが、この場合はむしろ綴りとの関連の方が濃そうである。つまり、 $ii > ee$ の場合と同じく、綴りに 'ea' をもつ部分は $heavy$ ヘーウイ, $lead$ レードのように長音記号「一」が施してある語の多い。 $u > uu$ も $good/gud/$ がグード $/guudo/$, $hood/hud/$ がウート $/uuto/$ など一連の例はあげられるが、同時に無声子音の前でも長音化させた $foot/fut/ > フート /huuto/$ のような例もある。

$\alpha : > a$ 現象は、綴り上母音後に r 又は l を含む場合が多く、したがって $/aru/$ となるものが多く、かなり一貫している。

$ai > ei$ については音韻的裏づけが乏しいにもかかわらず、 $fight/fait/ >$ ヘイト $/heito/$, $pipe/paip/ >$ ペイプ $/peipu/$ など、上記のもの以外にも実例が豊富で、本書全体を通してかなり一貫している。

その他、一貫性の問題は別として、以下にあげる音は変化様式が特殊な点で興味深いものである。

その第一は中舌母音 $/ə/$ で、リストに明らかなごとく実に多様に変化している。 $afford/əfɔ:d/ >$ アツホルト $/ahhoruto/$ は予測できるとしても、 $abandon/əbændən/ >$ エバンドン $/ebandon/$ の第一母音は弱強勢音節であることも考慮すると何とも解し難い現象である。同語の第三母音に関しては、 $button/batən/ >$ ビュトン $/bjuton/$ の第二母音など一連の単語が見出せるが、おそらく眼から入った綴り読みであろう。 $populous/pɒpjuləs/ >$ ポピュロウス $/popjurousu/$ の同音素に関しても同様のことが云える。 $butter/batə/$, $paper/peipə/$, $scissors/sizəz/$ など母音後に綴りが起こる諸単語ではかならず r 音ル $/ru/$ が入っている。前の母音は必ずしも綴りとの関連ではなく、 $-er$ シセル, $-or$ ブツトル $-ur$ ペブルなどに変化している。事実から見ると耳から入ったものかと思われる。ともあれこの音

が中舌半開母音で、音声学的観点からも種々の母音に変化しやすいこともあり、又英語音韻体系のなかでこの音の占める特殊な位置¹³を考慮しても、語林大成に表れた実体は、かなり無体系的ではあってもそれゆえにかえって、当時の英学者達が多分に神経を使ったであろう結果がうかがわれて興味をそそるものがある。

次に /ai/ と /ei/ について考えてみたい。大ざっぱに言えば [ai], [ei] という音連続は英語にも日本語にもある。もちろん少し詳細にみれば、英語では音韻構造上一音節でいわゆる falling diphthong と考えられているから第一要素はかなり強く長めで第二要素は弱く短かめである。日本語では、音素表記としては類似していても二モーラを数え二母音の連続とみるから、強さ、長さも大体平均している。しかし音素比較によって、E. /ai/ は J. /ai/¹⁴ に、E. /ei/ は J. /ei/ に置きかえられるのが自然である。ところが本書によれば、E. /ei/ > J. /ei/ の例はあるが E. /ai/ > J. /ei/ の方の例が断然多く両者の区別は示されていない。又 E. /ai/, /ei/ と J. /ee/ に代置されている例も少くない。したがって E. /ai/, /ei/ の差に一貫したすじは見出せないことはもとより問題だが、もう一つ興味深いのは J. /ei/ と J. /ee/ の関係である。日本語では、/ei/ は普通の話しことばでは [ee] と発音され、よほど限られた人または場合でないとは [ei] とはいわない。しかしここでは、E. /ei/ も E. /ai/ もともに J. /ei/ および /ee/ へ両様の変化をしており、その相違の基準はおし測りがたい。

/ʌ/ の変化は些が奇妙である。英語の /ʌ/ は音声的にいえば日本語 /a/ にかかなり近い。したがって E. /ʌ/ から当然 J. /a/ が予測されるのだがその実例は本書全巻を通じて見当らず、代表例はリストに示したごとくである。done/dʌn/ > ドン /don/ や come/kʌm/ > コム /kom/ に見られる J. /o/ にせよ、bubble/bʌbl/ > ビュッブル /bjubburu/ や pump/pʌmp/ > ピュンプ /pjumpu/ などの J. /ju/ にせよ、いずれも綴りからくる発音のように見受けられるが、この傾向も多数がそうであるというのみで例外は随所に見出せる。たとえば、gloves/glʌvz/ や dove/dʌv/ の /ʌ/ は done や come と類似の環境に起こりながらグロヘス、ドフとはならずグローヘス /guroohesu/, ドーフ /doohu/ となっているし、much/mʌtʃ/, cut/kʌt/ はミユツツ、キュツトとはならず、それぞれモツツ /motts/, クツト /kutto/ となっている。

E. /au/ も、E. /ʌ/ のように複雑ではないがやはり、音声比較の面からもっとも自然と考えられる音変化が示されていないものの一つである。E. /au/ は、細かい点や音節構造を度外視すれば、J. /au/ にかかなり近い音とすることができる。しかし資料に当たってみるとそういう例は見当らない。もっとも多いのが J. /ou/ で bough/bau/ > ボウ /bou/, out/aut/ > ヲウト /outo/ などであり、doubt/daut/ などでドート /dooto/ と二母音になっており、音声的には /o/ の長音化と考えられる。もっとも日本語では「オウ」と書いて実際は「オ

一」と読ませる傾向がかなり強いから（例，作業「サギョウ」，報道「ホウドウ」），/ou/ と /oo/ が日本語内ではほぼ同じと考えることは可能かもしれぬ。しかし両様の表記があってその差の基準が示されないところはやはり理解に苦しむところである。

以上若干の点を選んで論じたが，次に子音について，これも重点的に観察を加えよう。

2. 子音

子音では全般的にみて，予測できる者は大体でてきている。もっとも興味をひく様相を呈しているのは何といっても子音連結の移入形式である¹⁵。日本語の音節構造は原則として，/V/ 又は /CV/ であるが，一方英語の方にはいわゆる子音連結，つまり /CC-/， /-CC-/， /-CC/ などが非常に多い。日本語にこの CC¹⁶ が移入された場合当然 /-CC/ は， /CVCV/ その他は /CVC/ と置き換えられることが予測される。この，子音後に挿入される母音は，日本語の音韻体系にしたがって原則としては /u/， /t, d/ の後のみ /o/ である。以上のことを意識におき，とくに第一子音が閉鎖音の場合を選んで実例に当ててみよう。まず /pC/， /bC/ の場合は /p/， /b/ の後に予測通り /u/ が入っており，たとえば pretty/p_uriti/> プレテイ /p_ureti/， pleasant/plezənt/> プレゼント /p_uresento/， bring/brɪŋ/> ブリンキ /b_urinki/， blame/bleim/> ブレーム /b_ureemu/ のごとき例は多くみられる。ところが同じ閉鎖音でも調音点がより後の /t, d/ および /k, g/ の場合は予測に反して多様な変化を示している。若干例を拾ってみよう。

/t/ : trap/træp/> テレツプ /t_ureppu/， contrary/kɒntrəri/> コンタラリー /kɒntararii/

/d/ : draw/drɔ:/> ダラウ /d_uarau/， dragon/dræɡən/> デレゴン /d_uregon/

/k/ : claw/klo:/> カラウ /k_uarau/， crime/kraim/> キリーム /k_uriimu/， cripple /kripl/> ケレツプル /k_ureppuru/， clock/klək/> コロック /k_urokku/。

/g/ : grand/grænd/> ゲレンド /g_urendo/， gloves/glɒvz/> ゴローヘス /g_uroohesu/。

現代の英語音に，そして日本語体系への移入形式に慣れてしまっていると，上記の例は一見無体系のようでありこっけいにさえ思われるかも知れない。しかし客観的にみるとある種の規則性をもっており，これは言語学的には不自然な現象とはいえない。すなわち，これらが正しい音であるかどうかは全く別として，ただ示された表記の中で，第一子音後の母音と第二子音後の母音が一致している，ということである。もっとも他の場合と同様，常に例外はあり，たとえば glory/glɔri/ がゴロリ */g_urori/ とならずギロリ /g_irori/ となっていたりするが，この現象は子音連結全体を通じ相当に一貫しているものである。

次に子音連結の場合をも含めて語尾子音に附加される母音について一言しよう。予測とし

ては子音連結の場合と同様 /t, d/ の後では /o/, それ以外では /u/ であるが、実際には一部の例外を除きかなり規則的にそうになっている。わずかに /k/ のあとに /u/ でなく /i/ が起きている位のもので prick/prik/> プリツキ /purikki/, dig/dig/> デイキ /deiki/, bring/brin/> ブリンキ /burinki/ などがその例である。

子音でもう一点ふれておきたいのは, devocalization, つまり有声子音の無声化傾向である。英語の音体系の中で有声の閉鎖音, 摩擦音, 破擦音は末尾位置で度合の差はあれ無声化するから, 耳から入ったものと仮定すればこの一貫性は尊重に価すると思われる。たとえば, breed/bri:d/>ブリート /buriito/, leg/leg/>レク /reku/, dove/dʌv/>ドーフ /doohu/, does/dʌz/>ドース /doosu/, stage/steidʒ/>ステーチュ /suteetfu/. などに明らかのように, E. /d/>J. /t/, E. /g/>J. /k/, E. /v/>J. /h/, E. /z/>J. /s/, E. /dʒ/>J. /tʃ/ となっている。ただしこれにも少数の例外はあり, bag/bæg/ はバックとはならずバグ /baggu/ となっている。また末尾位置でなくても無声化現象が多く起きているところから, オランダ語の影響が強いことも容易に察しられる。

その他では E. /ʃ/ が J. /s/ に代置されているもの (bishop/biʃəp/>ピソップ /bisoppu/ など), E. /tʃ/ が J. /ts/ に代置されているもの (speech/spi:tʃ/>スピーツ /supiits/ など) の例が比較的多いのが興味をひく程度である。以上, 子音については主に三点をとりあげるに止め, 次は和訳英辞書に移ろう。

III. 和訳英辞書 (薩摩辞書)

いわゆる薩摩辞書¹⁷の方は語林大成¹⁷に比してはるかに近代的であり, 皮表紙, 洋紙, 洋とじの横書きの印刷である。まず扉左側に,

「 明治二歳 己巳 正月

和 訳 英 辞 書

一千八百六十九年新鐫

」

そして右側に,

「 AN

ENGLISH-JAPANESE

DICTIONARY (以下略)

」

とあり, 印刷は上海の American Presbyterian Mission Press とある。ここに資料としたものは第三版 (Third Edition Revised) であり, 次に「日本薩摩学生」による「改正増補和訳英辞書序」および英文の 'Preface' がある。この「序」はたて書きで, 漢字とかなの印刷であり, 初版から三版までの経過, 意図が簡単に記されているが, 二箇所ばかりに

あらわれる「皇国」ということばは、Gの場合と同様行を改め一字上げて書かれているのが面白い。英文 'Preface'の方がはるかに理解しやすく内容も詳細で native speaker Mr. Gamble が orthography をたしかめて正確を期した点が特記してあるが発音については述べていない。

全体の構成を大まかに述べると、全巻 677 頁、各頁はたて二欄に分けられ、各欄に平均二十数語扱っており、全体は三万数千語に及ぶので、語数の点からまずGとは比較にならぬ進歩である。各項目が大文字で始められているのはGと同様だが、単語のあとにそれぞれ斜体の小文字で品詞が記入されており、派生語への意識も見られるし、かなり多数の語項目に熟語も含まれている。たとえば Account, s. の項目には Upon all accounts, On account of, Of no account など 8 つの phrases が入っている。横書きと云ったが全体が横書き形式なのであって、事実上横書きなのは英語のみで、語意を表わす日本語も発音を表わすかたかなもたて書きであるが、Gの場合とは逆に、英語が、つまり横書きが基調となっているところが大きな相違である。各欄の上に大文字でみだしが印刷され、左欄の上のはその頁第一単語の頭三字を表わし右欄のものは最後の単語の頭三字を示している。近代的な形式だがこれには誤りもあり、たとえば 366 頁では MEA, MDE となっているが実は全頁 Mor- であり、しかも英語に MDE という連結はない。これ程のものではなくても、このみだしは随所でずれており、そのずれ方には一貫性がない、意図あつてのこととは受けとれない。

発音表記はGと同様かたかなである。したがってかぶせ音特性は一切でないし、分節音素のみにせよ、Gの場合と同じくどうしても日本語の音韻体系に決定的にしばられるので至極不完全なものにならざるを得ない。ただし今述べた制限内では種々工夫がこらしてあり、なかでも目をひくのは、各単語にかなをふらず、前の語と同音の部分は二本の棒線 (||) で示し前と異なる部分のみにかなを施して繁雑さを避けた点であろう。この方法は全巻に一貫していて能率的だが、時にこのゆえにかえって誤り又はあいまいと思われる点もあり折角の意図が惜まれる。

さて以下にGの場合と同様の方法により資料を選択、配列してみよう。

資料Ⅱ 和訳英辞書(薩摩辞書)

1. 母音

英語音素	日 本 語 音 素					
	音韻比較による予測	実 例		予測外 変化	実 例	
		英 語	日 本 語		英 語	日 本 語
i:	i:	feast/fi:st/ ceiling/si:liŋ/	フキースト/fiisuto/ シーリン/fiirin/			

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
i	i	chill/tʃɪl/ forgive/fɔːɡɪv/	チル/tʃɪru/ フォルギフ /foruɡihu/			
e	e	heaven/heɪvən/ sweat/swet/	ヘブン/heɪbun/ スウェット /suwetto/			
æ	a e	ham/hæm/ Latin/læɪn/ fact/fækt/ pan/pæn/	ハム/hamu/ ラテキン/ratɪn/ フェクト/fekuto/ ペン/pɛn/	aa	fathom/fæðəm/	ファーズム/faazomu/
a:	aa	calm/kɑ:m/ half/hɑ:f/	カーム/kaamu/ ハーフ/haahu/	oo	balm/bɑ:m/	ボーム/boomu/
ɔ	o	doctor/dɔktə/ hop/hɒp/	ドクトル /dɔkutoru/ ホップ/hoppu/			
ɔ:	oo	fall/fɔ:l/ stalk/stɔ:k/	フォール/fooru/ ストーク/sutooku/	or	born/bɔ:n/	ホルン/horun/
u	u o	cookery/kukəri/ pull/pʊl/ hook/hʊk/	クックリー /kukkurii/ プル/puru/ ホック/hokku/	uu	foot/fʊt/ good/gʊd/	フート/huuto/ グード/guudo/
u:	uu	food/fu:d/ beauty/bju:ti/	フートhuuto/ ビューティー bju:tfii/	o	hood/hu:d/ hoof/hu:f/	ホッド/hoddo/ ホッフ/hohhu/
ʌ	a	bubble/bʌbl/	バブル/babburu/	o oo	love/lʌv/ dove/dʌv/ done/dʌn/ glove/glʌv/	ロブ/robu/ ドウ/dou/ ドローン/doon/ グローブ/guroobu/
ə	(a)	なし		e o n	abandon/əbændən/ button/bʌtən/ collection /kəlekʃən/	エバンドン/ebandon/ ボタン/botton/ コレクション /korekufun/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
				oo or	populous /pɒpjʊləs/ butter/bʌtə/	ポピュロース /popjuroosu/ ボトル/botoru/
ə:	aa	なし		ir er or ur	bird/bɜ:d/ birthady/bɜ:θdeɪ/ service/sə:vis/ burn/bɜ:n/ hurt/hɜ:t/ return/ritə:n/ sir/sɜ:/	ビルツ/biruzu/ ビルツデー /birutsudee/ セルウイス /seruwisu/ ボルン/borun/ ホルト/horuto/ レチュルン/retfurun/ スル/suru/
ei	ee	paper/peɪpə/ way/weɪ/	ペープル/peepuru/ ウェー/wee/			
ai	ai	fight/fait/ crime/kraɪm/ bite/baɪt/ pirate/paɪreɪt/	ファイト/faito/ カライム/karaimu/ バイト/baito/ パイレート /paireeto/			
oi	oi	joy/dʒɔɪ/ noise/noɪz/	ジョイ/dʒɔɪ/ ノイズ/noɪzu/			
au	au	なし		ou oo	bough/bau/ out/aut/ doubt/daut/	ボウ/bou/ ヲウト/outo/ ドート/dooto
ou	oo	boat/bout/ home/houm/	ボート/booto/ ホーム/hoomu/			
iə	ia	なし		e, ii iir	experience /ɪkspɪəriəns/ hear/hiə/ year/jiə/	エクスペリエンス /ekisuperiinsu/ ヒール/hiiru/ イール/iiru/
ɛə	ea	なし		ieer	bear/bɛə/	ビエール/bieeru/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
				eer	hair/hɛə/ fair/fɛə/	ヘール/heeru/ フェール/feeru/
ɔə	oa	なし		oor	moor/mɔə/ pour/pɔə/	モール/mooru/ ポール/pooru/
uə	ua	なし		uur	poor/puə/	プール/puuru/
ɛiə	eia	なし		eer	player/pleiə/ prayer/preiə/	プレーエル /pureeru/ プレーエル /pureeru/
aiə	aia	なし		air	hire/haiə/ require/rikwaiə/	ハイル/hairu/ レクワイル /rekuwairu/
auə	aua	なし		our	flower/flauə/ our/auə/	フロウル/hurouru/ ヲウル/ouru/

2. 子音

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
p	p pu	perfect/pə:fɪkt/ pipe/paip/ play/plei/ pretty/prɪti/	ペルフエクト /perufekuto/ パイプ/paipu/ プレー/puree/ プリテイー /puritii/			
b	b bu	amiable/eimiəbl/ boy/boi/ break/breik/ bring/briŋ/	エーメエーブル /eemeeeburu/ ボイ/boi/ ブレイキー /bureeki/ プリン/burin/			
t	t to	tea-cup/ti:kəp/ time/taim/ introduction /intrədʌkʃən/	ティーコップ /tiikoppu/ タイム/taimu/ イントロデクション /intorodikʃun/	ta ts tʃ	contrary/kɒntrəri/ to/tə/ twenty/twenti/	コントラリー /kontararii/ ツー/tsuu/ ツウインター /tsuwintʃii/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
		trap/træp/	トレップ/toreppu/			
d	d do	doubt/daut/ Friday/fraidɪ/ draw/drɔː/ friend/frend/	ドート/dooto/ フライデイ/huraidi/ ドロウ/dorou/ フレンド/hurendo/	da de z to	dragon/drægən/ dress/dres/ burden/bædən/ do/duː/ food/fuːd/	ダラゴン/daragon/ ドレス/deresu/ ブルズン/buruzun/ ヅウ/zuu/ フート/huuto/
k	k ku	come/kam/ kennel/kənəl/ claw/klɔː/ cream/kri:m/	コム/komu/ ケン子ル/kenneru/ クロロー/kuroo/ クリーム/kuriimu/	ka ke ko ki	clasp/klæsp/ crime/kraim/ credit/kredit/ cross/krɔs/ criminal/kriminal/ eclipse/iklɪps/	カラスプ/karasupu/ カライム/karaimu/ ケレディット/kereditto/ クロス/korosu/ キリミ子ル/kirimineru/ イキリプス/ikiripusu/
g	g gu	give/giv/ goat/gout/ glue/gluː/ grease/griːs/	ギフ/gihu/ ゴート/gooto/ グリュウ/gurjuu/ グリーズ/guriizu/	ga ge	grand/grænd/ grasp/graːsp/ grain/grein/	ガランド/garando/ ガラスプ/garasupu/ ゲレイン/gerein/
f	h	cheerful/tʃiəfəl/ food/fuːd/	チールフル/tʃiiruhuru/ フート/huuto/	f	fit/fit/ coffin/kɒfɪn/	フィット/fitto/ コフフィン/koffin/
v	b	glove/glav/ heaven/hevən/	グローブ/guroobu/ ヘブン/hebun/	h u w	give/giv/ given/givən/ heavy/hevi/ vomit/yɒmit/	ギフ/gihu/ ギーウン/giun/ ヘウ井ー/hewii/ ウヲミト/womito/
θ	s	thief/θiːf/ thieve/θiːv/	スイフ/s(u)ihu/ スイフ/s(u)ihu/	z ʃ ts	thorn/θɔːn/ think/θɪŋk/ cloth/klɒθ/ length/lenkθ/	ゾルン/zorun/ シンキ/finki/ コロツ/korotsu/ レンツ/rentsu/
ð	z	either/aɪðə/	イーゾル/iizoru/	ʒ	these/ðiːz/	デーズ/ziiizu/

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
	d	they/ <u>ð</u> ei/ なし	ゼイ/ <u>z</u> ei/			
s	s ʃ	search/ <u>s</u> ə:tʃ/ sorrow/ <u>s</u> ɒrou/ season/ <u>ʃ</u> i:zən/ sick/ <u>s</u> ik/	セルチ/ <u>s</u> erutʃi/ ソルロー/ <u>s</u> orurou/ シーズン/ <u>ʃ</u> iizun/ シキ/ <u>ʃ</u> iki/			
z	z ʒ	resist/ <u>r</u> izist/ season/ <u>s</u> i:zən/ music/ <u>m</u> ju:z <u>ɪ</u> k/	レズイスト / <u>r</u> ezisuto/ シーズン/ <u>ʃ</u> iizun/ ミュージク / <u>m</u> juuz <u>ɪ</u> ku/	s	desire/ <u>d</u> izaiə/ デサイル/ <u>d</u> esairu/	
ʃ	ʃ	collection / <u>k</u> əlek <u>ʃ</u> ən/ shall/ <u>ʃ</u> æl/	コレク <u>ʃ</u> ョン / <u>k</u> oreku <u>ʃ</u> un/ シャル/ <u>ʃ</u> aru/	s	shake/ <u>ʃ</u> eik/ sheepish/ <u>ʃ</u> i:pi <u>ʃ</u> /	セーキ/ <u>ʃ</u> eeki/ シーピス/ <u>ʃ</u> iip <u>ɪ</u> su/
ʒ	ʒ	casual/ <u>k</u> æz <u>ʒ</u> uəl/ pleasure/ <u>pl</u> ez <u>ʒ</u> /	カジラール / <u>k</u> az <u>ʒ</u> ooru/ プレジュール / <u>pl</u> ez <u>ʒ</u> uuru/			
h	h	home/ <u>h</u> oum/ hood/ <u>h</u> u:d/	ホーム/ <u>h</u> oomu/ ホッド/ <u>h</u> oddo/			
tʃ	tʃ tʃi	cherry/ <u>tʃ</u> eri/ enrich/ <u>in</u> rit <u>tʃ</u> / march/ <u>m</u> ɑ:t <u>tʃ</u> / peach/ <u>pi</u> t <u>tʃ</u> /	チエルリー / <u>tʃ</u> erurii/ エンリッチ / <u>en</u> ritt <u>tʃ</u> i/ マーチ/ <u>m</u> aat <u>tʃ</u> i/ ピーチ/ <u>pi</u> it <u>tʃ</u> i/			
dʒ	ʒ[dʒ] ʒi[dʒi]	jacket/ <u>dʒ</u> æk <u>ɪ</u> t/ Japan/ <u>dʒ</u> əpæn/ stage/ <u>ste</u> id <u>ʒ</u> /	ジャツケット / <u>ʒ</u> akketto/ ジャパン/ <u>ʒ</u> apan/ ステーヂ/ <u>s</u> utee <u>ʒ</u> i/	z	jet/ <u>dʒ</u> et/ object/ <u>ɔ</u> bd <u>ʒ</u> ikt/ ゼット/ <u>z</u> etto/ オブゼクト / <u>ob</u> uz <u>ɛ</u> kuto/	
r	r	raisen/ <u>r</u> eizən/ write/ <u>r</u> ait/	レーズイン/ <u>r</u> eezin/ ライト/ <u>r</u> aito/			
l	r ru	leap/ <u>l</u> i:p/ dull/ <u>d</u> ʌl/	リープ/ <u>r</u> iipu/ ドル/ <u>d</u> oru/			

英語音素	日本語音素					
	音韻比較による予測	実例		予測外変化	実例	
		英語	日本語		英語	日本語
m	m	many/ <u>meni</u> / moon/ <u>mu:n</u> /	メニー/ <u>menii</u> / ムーン/ <u>muun</u> /			
n	n [n]	nail/ <u>neil</u> / north/ <u>nɔ:θ</u> / dancer/ <u>dɑ:nsə</u> / none/ <u>nʌn</u> /	子ール/ <u>neeru</u> / ノルツ/ <u>norutsu</u> / ダンスル/ <u>dansuru</u> / ノン/ <u>non</u> /			
ŋ	n[n] gu [ŋu]	ceiling/ <u>si:liŋ</u> / king/ <u>kiŋ</u> / kingdom/ <u>kiŋdəm</u> /	シーリン/ <u>jiirin</u> / キン/ <u>kin</u> / キングドム /king <u>udomu</u> /			
w	w	sweep/ <u>swi:p</u> / wolf/ <u>wulf</u> / zero woman/ <u>wumən</u> / wood/ <u>wud</u> /	スウィープ /suwiipu/ ウヨルフ/ <u>woruhu</u> / ウーメン/ <u>uumen</u> / ワード/ <u>uudo</u> /			
j	j zero	communicate / <u>kəmjunikeit</u> / music/ <u>mju:zik</u> / yeast/ <u>ji:st</u> / yearn/ <u>jə:n</u> /	コムニケート /k <u>ommjunikeeto</u> / ミュージク /mjuuziku/ イースト/ <u>iisuto</u> / エルン/ <u>erun</u> /			

薩摩辞書のかたかな表記は、細かい点をすべてあげれば問題はつきないが、全般にGに比して長足の進歩を示している。多くを論じなくても上記のリスト自体がかなり多くを語ってくれるが、もう一つここに両書の発音の比較を示すリストをあげて観察しよう。英語音素を両書がそれぞれ日本語のどの音素と受けとめたかを一定の尺度にしたがってかな表記から転記したものである。

資料 Ⅲ

	日 本 語 音 素			
	英語音素	音韻比較による 予 測	予 測 外 の も の	
			諸 厄 利 亜 語 林 大 成	和 訳 英 辞 書 (薩 摩 辞 書)
母 音	i:	ii	ee, ei	
	i	i (e)	ii, ei	
	e	e	ee	
	æ	a e	ee	aa
	a:	aa	e, er, a, ar	ar
	ɔ	o		
	ɔ:	oo	or	or
	u	u o	uu	uu
	u:	uu	eeu	o
	ʌ	a*	o, oo, u, ju	o, oo
	ə	(a)	e, o, ou, er, or, ur	e, o, u, oo, or
	ə:	(aa)*	ir, eer, jur	ir, er, or, ur
	ei	ee	ei, e	
	ai	ai	ei, ii, ee, i	
	ɔi	oi		
	au	au*	ou, oo	ou, oo
	ou	oo		
	iə	(ia)*	e, i, eer	e, iir
	ɛə	(ea)*	eir, eer	ier, eer
	ɔə	(oa)*	oor	oor
uə	(ua)*	uur	uur	
eiə	(eia)*	eijur	eeer	
aiə	(aia)*	air, eir, ir, iir	air	
auə	(aua)*	our	our	

英語音素	日本語音素		
	音韻比較による	予 測 外	の も の
	予 測	諸 厄 利 亜 語 林 大 成	和 訳 英 辞 書 (薩 摩 辞 書)
p	p pu		
b	b bu	h	
t	t to	ta, te	ta, ts, tʃ
d	d do	da, de, di, to	da, de, z[dz], to
k	k ku	ka, ke, ko, ki	ka, ke, ko, ki
g	g gu	k, ge, go, gi	ga, ge
f	h	p	f[ɸ]
v	b*	h, w	h[ɸ], u, w
θ	s	ts	z, ʃ, ts
ð	z[dz]*d	s, t	ʒ
s	s ʃ		
z	z[dz]*ʒ[dʒ]*	s, ʃ	s
ʃ	ʃ	s	s
ʒ	ʒ[dʒ]*	ʃ	
h	h	(zero)	
tʃ	tʃ tʃi*	tʃu, s, ts, k	
dʒ	ʒ[dʒ] ʒi[dʒi]*	ʒu[dʒu], z[dz], tʃu, j	z[dz]
r	r[r̄]		
l	r[r̄] ru[r̄u]		
m	m		
n	n [n̄]		
ŋ	n[ŋ]*gu[ŋu]*	nki[ŋki]	
w	w zero*[u]		
j	j zero*[i] e		zero

註：資料 I, II と同様，誤りとみられるもの，実例の極度に少ないものは省略した。

* 印は，予測に反し，語林大成に実例のないもの，() は，薩摩辞書に実例のないものである。

1. 母音

まず資料Ⅲを大ざっぱにみただけで明らかに云えることが一つある。それは、SではGに比して、右欄に属する音素つまり理論的に予測しがたいものが少いということである。

さらに詳細に調べるとSでは、左欄に属する音素つまり予測可能なものの比重が非常に高いのである。既述のごとくGの構成が不完全でT以下の資料を極度に欠いており、又種々の点で両者の程度が極端に異なるため、統計的に比率を算出することの意味があまりみとめられず、数的に明示することを断念したが、今述べた二点は明らかであり、特に母音比較で目立っている。これはとりもなおさずGに比しSの一貫性をもの語るものである。もちろん問題は多く残されているけれども、少なくともGとの比較においてSでみてははるかに体系的な音韻記述がなされているということである。

少しく事例に当たってみよう。まずGで難行した E. /i:/, /i/, /e/, /ei/, /ai/ がSではすっきりと一貫している。peace/pi:s/, feast/fi:st/ はもはや /peese/, /heesuto/ ではなくそれぞれ /piisu/, /fiisuto/ であり、しかも E. /f/ を表わすのに「フ井」という日本語にない音連結を表わすかなを考案して認識の細かさを表現する努力が払われている。ceiling /si:lin/, receive/risi:v/ も /seirin/, /reseihu/ ではなく /jiirin/, /refjihu/ と /ii/ に統一されている。

Gで E. /ei/ は J. /ei/, /ee/, /e/ などに変化しているがSでは日本語の体系に転移し J. /ee/ で統一されている。すなわち way/wei/ は J. /wei/ でなく /wee/ となり他例の場合も一貫している。E. /ai/ はGでは変化が多様で、とくに ai>ei 現象がどういふわけかかなりの一貫性を保っていたが、Sではこの点も J. /ai/ で統一されており、日英両語の比較上ごく自然な移入である。

さて逆に、依然不可解なのは E. /ə/ と E. /ʌ/ の変化である。/ə/ の場合はⅡですでに述べたように、英語音韻体系中に占めるこの音の特殊性もあり、加えて綴りからくる混同が大いに手伝ったことと思われる。変化の中でGにはなかった /u/ は station/steifən/ などの最終音節を「シュン」と表わしている点で、音声的にはかえって細心の観察がある。/ʌ/ に関してはGの場合の他に /aC/, /oC/ など子音が後続して起こる例が多数見られる。これはこの母音に続く子音を重ねている現象で、聴覚的に、したがって音声的にみて不可能なことではない。

2. 子音

子音では母音に見られたような大きい進歩は見出せない。Gでも全般的にいて予測でき

る音は大体でていたが、このことはSにおいても同様である。子音の場合は資料ⅢによるとSの方が変化に多様性があるものも少ない。ここにいちいち言及する要はないが全般的にSの方が子音に対しても観察が細心だということが云える。又音素配列のレベルからみて日本語の音体系に、より深く移入されているということもあげられる。このあとの方の点は、英語の発音ということから考えては却って望ましくない現象かもしれぬ。たとえば E. /t, d/ を例に考えてみよう。日本語で、/t, d/ はやや特殊な分布をなしており、母音 /a, e, o/ の前では起こるが /i, u/ の前では起こらずそれぞれ /tʃ, dʒ/, /tʃ, dʒ/ に変化する。本書では /i/ の前の現象はごく少数例あるだけだが、/u/ の前の現象はかなり一貫して起こっており、したがって /t, d/ の移入形態として /ts, dz/ が頻出している。

Gでとりあげた子音連結については、依然注目すべき進歩はみられず、予測に反して、Gにみられたと同様の現象、すなわち「第一子音後と第二子音後の母音の一致」が若干の規則性をもって表われている。crime/kraim/ はカライム /karaimu/, criminal/kriminəl/ はキリミナル /kiriminaru/, crucible/kru:sibl/ はクルシブル /kuruʃiburu/, credit/kredit/ はケレデキット /kereditto/, cross/kros/ はクロス /korusu/ など実例は豊富である。しかしこの規則性のわく外の実例が多くあることも事実で、体系的であるとは云えない。強いて云えばGの場合よりも、日本語への同化度が高い傾向にあるということである。同時に、日本語体系にはない音連続を認識して表記法に表わそうとする努力は見られ、上述の弱点を補っている。福沢諭吉のヴヴと同様、当時すでにそのような意識があったことがわかって興味ある。たとえば /fi/ フ井, /fe/ フェ, /fo/ フォ, /ti/ テ井, /di/ デ井はかなり一貫して用いられており、とくに tune のテ井ューンのように E/tju/ に対して「テ井ュ」が考案されているなどは苦心のあとがうかがわれる。ただし /si/ はス井とならず一貫して、「シ」に対し /zi/ は大多数「ジ」だが散発的に「ズィ」が用いられその差の基準は明らかでない。又 /wi/ に対してウ井は理解できるが /v/ がウで一貫しており /vi/ はウ井, /va/ はウァとワが無差別に用いられている。

子音の無声化に関してはGの場合とほぼ同じことが云え、現象として注意をひくが、進歩のあとはあまり見られない。この他Gで目だった E. /s/ > J. /ʃ/ 現象は数が極度に減少し、J. /ʃ/ で受けている例が目だって多く、E. /tʃ/ > J. /ts/ の例はSでは見られなくなっている。

おわりに

以上、日本における英語研究史のうち、第一期および第二期から、諳厄利亜語林大成和訳英辞書をそれぞれ資材として選択し、その発音表記について述べた。表記は多様性にとみ問題点をすべて論ずることはとうてい叶わぬところであるが、いくつかの点のみをみるだけでも、

両書に表われた諸事実は、日本における英学発達の流れの中で重要な位置をもつものであったことは明らかである。現代のわれわれはそれらの存在を、それぞれの編まれた時代背景に照らして受けとって始めて、その歴史的価値をみることができる。多様性にとむということは規則性に乏しいということでもあるのだが、その事実をそのまま知ることも自体が重要である。またこの一、二期の段階では、全体が整った体系的記述と受けとることはできないが、少しく詳細にみることによって、それぞれの特徴、英語音認識の度合が明らかになり、又不完全とはいっても両者の間に見出される大きな開きが、英学の発達を如実にもの語るものである。

註

1. 東山節子氏（文法）、森岡健二氏（語彙）と共同担当。
2. この前慶長5年（1600）William Adams 来朝以来英語音を日本語に同化した時代があり、豊田実氏は「日本英語史の研究」の中に、これを第一期としてあげている。しかしこの時代はまた客観的観察の対象とはしにくいのでここでは扱わない。
3. 「日本の英学100年」 p.288 参照。
4. ここで用いた写本のとじ違いのようである。
5. 文中、「命ありて」「上命の」「国家」「皇国」「本朝」などのことばは、行を改め、しかも一字分上から書いてある。又変体がなが多数でたとえば「て、よ、発、を、茂、巻」など随所にある。
6. ここでは、当時の日英語と現代の日英語が発音上著しい変化をしていないとの仮定にたっている。
7. “...loan words are made to conform...closely to the phonologic or morphologic patterns of the language, ...” “...borrowing is a more or less random and unsystematic process. Individual items are involued, seldom definable groups of words.” H. A. Gleason, Jr. : *An Introduction to Descriptive Linguistics*, pp.397~8
8. 推論の過程および、音素表記には表わされぬ条件変異などの音声特性については、「借入語に関する音韻論的一考察」東京女子大学英米文学評論第10巻第1号に述べたので、ここでは直接必要な部分のみ [] 内に示すことにする。
9. 二、三重母音はこれに準ずるものとして省略する。
10. 音素表記法については論の分れる点が多いが、ここでは、I. P. A.により、いわゆる D. Jones 式を用いることにした。現在もなお日本で広く用いられており、多くの英和辞書もこれに従っているからである。
11. たとえ同記号で表記されても、日英の音声形式は異なり音韻体系もそれぞれ独立である以上全く同じ音にはならないことは周知である。その詳細に関しては原則としてふれないことにする。
12. 地方によってこの glide の強いところは少くない。
13. 音声的にも中間的母音で変化しやすく、又英語の中で決して strong stress をもたないという特徴があり、 ω の機能は複雑である。J.R. Firth は、とくにこの点に注目して独特の論を展開しているほどである。Firth: “Sounds and Prosodies”, *The Transactions of the Philological Society*, 1935.
14. 以下必要と思われる個所のみ、E. (英語)、J. (日本語) と記す。
15. 英語の子音連結については「現代英語発音における問題点-子音連結に関して」東京女子大学英米文学評論第9巻第1号にややくわしく述べたので省略するが、日英両語を比較するさい無視できない重要な一面であり、移入に際して両語の音韻体系の差を明らかに示すものである。

16. CCC, CCCC も英語に存在し、移入に当って問題となるが、これは CC と同じ道理で論じ得るので割愛する。

子音間の母音挿入に関して日本語にやや例外的特徴がある。それは、無声子音にはさまれた、low pitch の /i/ と /u/ は無声化又は脱落し、脱落とみるさいは前の子音が音節を形成する、という特性によるものである。したがって、たとえば sky/skai/ は /sukai/[sukai] 又は [skai] となり spring /sprɪŋ/ は /supuringu/[supuringu] 又は [spuringu] となる。

17. 以下、それぞれ S. G. と略記する。

参考文献

資料

本木正栄ら編：諸厄利亜語林大成 長崎 1814. (森岡健二氏蔵)

薩摩学生編：和訳英辞書 (薩摩辞書) 上海 1869.

参考資料および参考書

福沢諭吉増訂：増訂華英通語 1860.

Gleason, H. A. : *An Introduction to Descriptive Linguistics*, New York, 1955.

服部四郎：音韻論と正書法 東京 1951.

市河三喜他編：日本の英学 100 年 (明治編) 東京 1968.

桜井役：日本語教育史稿 東京 1936.

茂亭村上義茂：三語便覧 江戸 1856.

豊田実：日本における英学史の研究 東京 1963.

Jones, D. : *An English Pronouncing dictionary*, London, 1956.

市河他編：新英和大辞典 東京 1961.